

## 書評 石田浩編著『中国農村の構造変動と「三農問題」 -- 上海近郊農村実態調査分析』

著者	田原 史起
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	47
号	10
ページ	40-45
発行年	2006-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00041114">http://doi.org/10.20561/00041114</a>

石田浩編著

『中国農村の構造変動と「三農問題」 上海近郊農村実態調査分析』

見洋書房 2005年 305ページ

た はら ふみ き  
田 原 史 起

はじめに

本書は、編者らのグループによる前2作〔石田1993；1996〕で展開された上海近郊農村研究の続編としてとらえられる。前2作は奉賢県（現奉賢区）の一村落を事例として、各種档案とインタビュー資料を駆使し、とりわけ人民共和国内体制下の社会経済の変遷にウェイトを置きながら「厚い記述」により描き出す方法がとられていた。ほぼ10年後に刊行されたことになる本書では、前作のフィールドの隣村を含む上海市内の3村落を主たる対象として、改革以降、とくに最近10年来の変化を追っている。現状における「問題」発見と解決に向けた実践的志向性がより鮮明に打ち出されているといえる。

本書の内容

本書は、本論9章分に序章と「補論」を加えて11の章からなる。

- 序章 「上海農村総合研究」の研究課題と調査方法
- 第1章 上海近郊農村の社会経済概況 南匯区・奉賢区・宝山区の3調査村の事例
- 第2章 上海近郊農村10年間の新変化
- 第3章 上海近郊農村の構造変動と農家経済 3カ村農家アンケート調査分析
- 第4章 上海農村における近郊性

- 第5章 上海近郊における民営企業の作業管理 新たな事例分析方法の試み
- 第6章 上海近郊農村の経済発展と家族・家計
- 第7章 上海近郊農村における村政府の性格
- 第8章 上海近郊農村における人口管理 社会主義市場経済体制下の戸籍制度
- 第9章 上海近郊農村における生活環境の概観
- 補論 上海近郊農村の農地転用と農業の存在意義 松江区農村の調査事例

序章では本プロジェクト「上海農村総合研究」立ち上げの経緯、研究課題と経過、調査方法などが説明される。

つづく第1章では、統計年鑑、現地の地方政府提供による資料、村務公開欄などの情報を用いて、主たる考察対象地域である南匯区C村、奉賢区B村、宝山区S村の3調査村の概況が押さえられている。行政区画、産業構造、就業構造、郷鎮企業、農業経営、村有地経営などに触れていることからもわかるとおり、本書の関心は経済的側面での変化に注がれている。

第2章は、奉賢区Q鎮に焦点を絞り、10年前に詳細な現地調査が行われていた村と現在の隣接村落B村を引き比べながら、村営企業、農業、耕地経営、階層、村と小組の役割、就業などの側面に着眼し1988年から2000年にかけての「変化」を浮き彫りにしている。

第3章は、調査村落の土地利用と農業経営、および労働力構成の変化と兼業化についての統計資料や地方政府提供の現地資料により解明した後、農家アンケートを利用して上海との社会経済的ネットワーク、農外就労と年収などについて、3村の事例を用いて検討している。

第4章は、主として地理学的アプローチを用いて、近郊農村の「近郊性」について議論している。調査地の農民と上海との関係を、親戚の有無やつき合いの頻度などのアンケート結果や農民の個人史から分析し、また上海市レベル、宝山区レベルの統計資料から各地域を近郊性諸指標（野菜生産、郷鎮企業、外来者）によりマッピングした図を用いて、市場経

済の深化と歩を同じくした近郊性の出現は、市場経済が本質的に内包している「不均等性」をもつものになると結論づけている。

第5章は、いわゆる「参与観察」の方法による民営企業の実態把握の試みである。フィールドとなったのは南匯区に位置する養鶏場であり、この章の著者は2回の参与観察を通じて、養鶏場の組織・リーダーの役割や養鶏ラインの仕組み、具体的な作業の流れを臨場感豊かに記述している。そのなかで見出された点は、当該養鶏場では多くの企業とは異なり経営者の一族が管理職を独占しているわけではないこと、地方出身の出稼ぎ者が「班長」として地元農村出身の労働者とペアを組む配置がとられているが、両者の間には暗黙の緊張関係が存在していることである。

第6章は「家計」に焦点を当てている。ここでは、調査対象3村落の経済発展水準の違いを踏まえた上で、家庭内での労働力数が家庭収入に対して、また年齢、学歴、性別などの要素が個人収入にどのように影響しているのかを、アンケート結果を駆使して分析している。その結果、C村とS村では主に家族のなかの労働力数、とくにそのなかに賃金の高い正式工が何人いるかによって家計年収の格差が発生し、S村ではそれに加えて自営業の家計収入が大きくなる傾向があること、賃金格差に対する年齢要素は弱く、学歴要素は強いこと、を見出している。

第7章は近郊農村の「村政府」の特質を見出すことを目的とした論考である。ここでは本プロジェクトの主要なフィールドである3村に加え、宝山、松江の3村を加えて合計6村の村幹部、村財政のデータを概観しながら、全体的な傾向性を読みとろうとしている。その結果、調査村に共通の傾向として、幹部達が企業の誘致をはじめとする営利活動をその職務の主軸に据えている点、村財政も基本的に村内の企業の活動に依存している点、を結論として導いている。

第8章は、外地からの労働者の流入が多くみられる上海近郊農村の実態に深くかかわる戸籍制度、とりわけ暫住人口の管理規定についての考察である。著者によれば、都市と農村の二元的管理を基本とす

る従来の戸籍制度においては、都市に比較して農村の戸籍制度の要求水準は低かったとされる。しかし改革開放の進展のなか、「都市でのみ暫住登記を行い、長期の暫住は事実上禁止する」という発想から、「暫住登記の範囲を拡大し、長期の暫住を認め、『暫住証』を通じた管理を行う」という発想に向けて転換が進んでおり、その背景として、調査地の外来労働力にみられるように「(内陸)農村から(沿海)農村への」労働力移動が存在していることが示される。

第9章は調査地の「生活環境」問題を取り上げている。とくに宝山S村での農家訪問調査に基づき、居住環境、生活排水、ゴミ投棄、エネルギーなどの各方面の実態を把握した後、上海近郊農村においては郷鎮企業の勃興と農民の生活様式の変化によって、生活環境は非常に悪化し深刻化していると指摘する。

最後の「補論」は全体の議論を締めくくる役割もあるが、調査地が本書で取り上げた主要3村とは異なっているため「補論」の位置づけとなっている。ここでは松江区の2村について、本書第1章で行われたような土地収用、農業、就業構造、外来労働力などの社会経済概況が述べられた後、28世帯に対するアンケートと6世帯の農家訪問インタビューを加えながら、出稼ぎ農民の教育・医療問題や高齢者問題の深刻さに注意を喚起し、「景気のよい話は別にして、内在する諸問題を解決しなければならない」と結んでいる。

以上、9人の著者により描かれた「近郊農村の三農問題」は多岐にわたる内容を含んでいる。「三農問題」といえば、主として中西部内陸農村の貧困問題として取り上げられることが多い<sup>(注1)</sup>。著者たち自身、1990年代に入ってから内陸農村の「三農問題」が関心を集めるなかで、「沿海の大都市近郊農村は内陸農村に比較して経済は発展し、農家経済は豊かで、農民は生活をエンジョイしているのではないかと想像した」(25ページ)という。ところが実際に調査してみると、大都市近郊農村も独自の問題を抱えていることが明らかとなった。こうして定型化された「発展を謳歌する」都市近郊農村イメージは打ち壊されたわけだが、本書がその代わりに提示した上

海近郊農村の「問題」を評者なりに整理・要約してみれば、以下の2点にまとめられる。

第1に、調査地における耕地の減少と農外就労の普遍化である。集団経済時代の後半、とりわけ1970年代から都市の拡張により土地の収用と工業用地への転用が進み、近郊農村では程度の差こそあれ耕地が着実に減少している。その結果、労働力数に占める農業従事者の割合は激減している（C村、B村、S村でそれぞれ16、6、7パーセント）。減少した耕地の利用はB村の「機動地」にみられるように、少数の農家に請け負わせることで高度化・集約化を進める。

農地を収用した国有企業や社隊企業は当初、耕地を失った農家の子弟に優先的に職を配分した。しかし1990年代初頭に至って、国有企業や郷鎮企業は軒並み業績不振に陥った結果、人員整理を行わざるを得なくなったり、倒産の憂き目に遭うなどした。従来の郷営、村営の企業は大多数、私営企業に変わり、「コミュニティの企業」から「コミュニティにある企業」へと大きく転換している（下線は評者）。これらの企業にはもはやコミュニティの住民を雇用する義務はなく、職を失った農民は市場経済化のなかであって自力で就労先を探すようになっていく。

第2に、農外就業の多元化と世帯間経済格差の発生である。上記の郷鎮企業の淘汰は1990年代における全国的現象であるが、近郊農村にはそれなりの特徴がある。内陸の場合は、乱立した郷鎮企業の大部分が淘汰され、農外就労としては外地に出稼ぎ先を求める他はなくなった。これに対し、近郊農村の場合は市場化に適応した企業は生きながらえ、同時に外資企業の進出などに助けられつつ、農外就業の機会を提供し続けている。したがって近郊農村という条件下では、とりあえずの就業先を見つけるには困らない。

ところが、かつての「コミュニティの企業」への就職と比較し、私営企業の正式工への就職はより高い能力・技術が求められ、この競争に打ち勝つことのできない者は、臨時工や打工（出稼ぎ）に甘んずるしかない。とくに平等主義的な「コミュニティの企業」の時代を知っており、しかも學歷や技術に乏

しい高齢者にとって、安定した農外就労の確保は困難となっている。第3章、第6章などの検討から明らかになったのは、3村落の農家家計にみられる格差が、このように多元化した農外就労の内容と深くかかわっているという点である。すなわち、正式工が多いS村、臨時工が多いB村、出稼ぎの多いC村の順に家計は高い収入を得ているのである。

### 本書の意義

以上、本書の意義は、まず何をおいても、問題が発生している「現場」に分け入って、研究の基礎となる一次データを作り出し、それに基づいて説得的な議論を展開したことに求められよう。だが本書の価値は単なるデータ蓄積の面に止まらないのであって、ここでは次の点を指摘しておきたい。

それは「近郊農村」をひとつの問題領域として自覚的に取り上げた点である。中国の近郊付近の農村においてフィールド・ワークを行った研究は無数にあると思われ、日本語による近年の単行本に限っても相当数が刊行されている〔佐々木・柄澤 2003；今村・張・小田切 2004；石原 2003；季 2004など〕。しかしそれらの多くは、近郊農村の特徴そのものに関心があるというよりは、様々な事情により「結果として」近郊農村が調査地点になったというものである。これに対し、本書の筆者らは、いわば戦略的に、上海近郊の3村（松江を含めると6村）の近郊村落を選択している。フィールド事例の検討は中国農村一般についての結論を導くためではなく、あくまで近郊農村の「近郊性」とでも呼ぶべき特質を見出すために行われている。

それでは、筆者らが見出した「近郊性」とは何か。残念なことに、この間に端的な解答を与えた箇所が本書の文中にあるわけではない。そこで評者が全体を通読して得た印象に基づいて要約してみれば、近郊農村の特色のひとつは、その発展における「外発性」にあると思われる。

近郊農村は一般農村に比較して、都市からの市場化の影響をより直接的に被る距離にあり、大きな変化がコミュニティの外部から押し寄せるために、そ

の発展ぶりを眺めた際には、外在的要素が内在的要素を凌駕するように見える。近郊農村の住民は、コミュニティの発展において主体的な力を発揮しようとする以前に、「棚ぼた式」にもたらされる利益分配の問題に気を取られ、それを最大化することだけに關心をもつのである。第2章が改革以降の奉賢農村の発展を跡づけながら主張しているのは、近郊農村の幹部・住民が常に受動的な「従属決定的行為主体」だった点である。また第7章は企業の誘致活動に自己の利益を見出そうとする村幹部らの「営利的」側面を強調している。村外部の経済環境の激変は、村内の集団資産の価値を急激に高め、集団資産の管理者らの私的キャプチャーの機会を拡大する。これらの傾向に通底しているのは、近郊農村の発展が基本的に外部で生じた急激な環境の変化に巻き込まれつつ生じていること、すなわち発展の外発性という基本条件であろう。

#### 本書への疑問

##### (1) 近郊農村の「三農問題」は「経済問題」か？

上記のような意義が認められるとしても、本書の読後感には、どこかすっきりしないものが残る。大都市近郊農村にも様々な問題があることは確かだとしても、本書を読む限り「どこが、どのように『問題』なのか」が、切実さを伴っては伝わってこないのである。外部からの市場化の衝撃に直接、見舞われることからくる諸問題はあるだろう。第9章の扱う生活環境の問題はその集約的表現かもしれない。しかし全国の農村を視野に入れるなら、都市近郊農村は結局のところ内陸部に比較して遙かに豊かであり、少なくとも経済的にみて多くの「問題」を抱えているとはいいがたいのではないか。

もしも「近郊農村」が重要なイシューになりうるとすれば、それは貧困化そのものにあるというよりも、土地という伝統的保障が失われたなかで、成功者と敗退者、そして内陸部からの外来者がいない交ぜとなって作り出す複雑な社会状況が、政治社会的な不安定状況に直結する火種を抱えているためであろう。にもかかわらず、本書は調査対象コミュニティ

および農家の経済状況を主たる論点として、統計データや家計アンケートの結果を積み重ね、ある種の素朴な経済変動アプローチから踏み出すことがない。物足りなさの根元はこのあたりにあるようだ。

たとえば、第3章その他で強調されているような、1990年代以降、郷鎮企業の不振によってもたらされた農外収入の不安定さ・不十分さという特徴は、市場経済の原則からすれば至極まっとうな方向性であって、かつての平等主義的な就業が曲がりなりにも可能であった時代の方が「問題」であったともいえずなくもない。また第6章では、年齢、学歴、性別などで生ずる個人の収入格差が問題とされている。これらの箇所には、格差の発生それ自体が直ちに「問題」を構成しうる、というような方法的前提があるのだと思われる。

しかしむしろ重要なのは、本書で述べられる時代の変化や経済的格差の存在が「問題」として住民に感じられているという事実そのものである。ここで検討の対象となるべきなのは、こうした主観的認識を生み出している近郊農村独自の社会状況の方である。客観的に観察可能な貧困問題ではなく、主観的認識こそが「近郊農村の三農問題」を構成していると考えられる。

「主観」の力とはとるに足らぬようにみえて、実は重い問題である。社会的現実として感じられ、表出した「不満」こそが、人々を動かし、政権や社会全体の不安定化要因をも構成するためである。たとえば第4章、第7章でも触れられている「集体上访」などの集合行動は、大部分、もしくは主として経済的な貧困状況で説明できるものであろうか。近年の農村研究が示すのは、本当に貧困な農民が経済的負担に耐えかねて「上访」を起こす、という構図は意外に少ないという事実である。上访行為の主体となりやすいのは、どちらかといえばまずまずの暮らしぶりの農民であり、その背後には情報が入りやすいことによる権利意識の鋭敏さや、都市部のメディアにもコネクションをもち、中央政府の「三農」政策を盾に取ることを含め政治的リスクの計算に長けた、相当にしたたかな近郊農民の姿がある<sup>(注2)</sup>。そうしたたたかさは、第7章で触れられている、集団経

済から恩恵を被りつつもその点には触れず、分配の不正さに対してのみ強い不満を表明するS村民の姿に示されているはずである。

(2)比較分析のメリットは活かされているか？

本書は、「上海郊外の南匯区D鎮C村・奉賢区Q鎮B村・宝山区Y鎮S村の3カ村を中心にして比較分析」(24ページ)した研究であると冒頭に述べられている。ひとつの村を深く掘り下げるモノグラフの手法ではなく、調査対象を3村落に絞ったことは、それなりの有利な点があるのであって、それは比較による類型化と、類型を分かち基本的変数を抽出できるということである。

ところが評者のみるところ、本書の全体を通じて、3つの村の概況や数値が並列的に述べられることはあっても、それぞれの村の違いは詰まるところどういふ類型としてあらわれ、そのタイプの違いは何に由来しているのかという「比較分析」を本格的に展開した箇所がほとんど見当たらない。たとえば第3章の農家アンケートは3つの村について同様の質問をしており、比較分析には格好のデータが入手されているのだが、本文では村ごとの傾向が並列的に指摘されるばかりで、どうしてそうした差異が生ずるのかという比較分析は一向になされない。著者らは客観的なデータの提供者として背後に姿を隠してしまっており、「分析」の作業はそのまま「読者への宿題」として投げつけられてしまったような戸惑いを感じる。

思うに、本書のアプローチは3村落の差異に着眼してそれを際立たせるというよりは、色々な事例をざっと並べてみて、むしろそのなかに共通性を見出しながら、平均的な「近郊農村」の映像をおぼろげに浮かび上がらせる、というものである。

そのためであろう、本書が提出する近郊農村の「三農問題」を最も典型的に体现する調査地、あるいは「近郊性」を最もよく代表する調査地が南匯C村なのか、奉賢B村か、それとも宝山S村なのかという点については筆者らの考えが述べられることはない。かりに上海市街地に最も近く、経済発展の程度が高いとされている宝山S村を取り上げてみると、経済的に豊かであることからより「問題が少ない」

ケースとして位置づけられるのか、あるいは逆に都市に深く巻き込まれていることで「問題点」が集中的に表れたケースとして位置づけるのか、本書のスタンスは終始、曖昧である。あるいは第4章が述べるように、「そうした多様性こそが近郊農村の特徴」(160ページ)なのだとするの結論のひとつではあるだろうが、あまりにも漠然としてはいまいか。

比較分析を通じ、もしも近郊農村についていくつかのタイプ分けが可能であるなら、あえて提示する大胆さが欲しいところである。具体的な問題解決への糸口も、異なるタイプ間の比較により示唆が得られることが多いであろう。こうした理論的検討を含め、本書の続編に期待したい。

最後に、近郊農村というリアルタイムの重要性を孕んだ問題について、本書の著者の方々がこれほど多くの新しい貴重なデータをつかみ取り、問題提起を行ったことに対し、敬意を表したい。

(注1) たえば賀(2003)は、中国の「農民問題」とは、つづめていえば中西部内陸農村の問題であるとの認識を示したうえで、にもかかわらず沿海部農村、都市近郊農村ばかりが研究対象として取り上げられている現状に警笛を鳴らしている。

(注2) Bernstein and Lü (2003)を参照。逆にみるならば、政治的リスクが高く、都市にコネクションのない時、農民は保守的たらざるを得ない[賀2003, 40-44]

文献リスト

<日本語文献>

今村奈良臣・張安明・小田切徳美 2004. 『中国近郊農村の発展戦略』農山漁村文化協会.  
 石田浩 1993. 『中国農村経済の基礎構造 上海近郊農村の工業化と近代化のあゆみ』晃洋書房.  
 石田浩編著 1996. 『中国伝統農村の変革と工業化上海近郊農村調査報告』晃洋書房.  
 石原潤編著 2003. 『内陸中国の変貌 改革開放下の河南鄭州市域』ナカニシヤ出版.  
 季増民 2004. 『変貌する中国の都市と農村』芦書房.

佐々木衛・柄澤行雄編 2003. 『中国村落社会の構造と  
ダイナミズム』東方書店 .

*China*. Cambridge, UK: Cambridge University  
Press.

< 英語文献 >

Bernstein, Thomas P. and Xiaobo Lü 2003. *Taxation  
without Representation in Contemporary Rural*

< 中国語文献 >

賀雪峰 2003. 『新郷土中国 転型期郷村社会調査筆  
記』桂林 広西師範大学出版社 .

( 東京大学大学院総合文化研究科助教授 )